

【卒業生寄稿】

言語習得を通じて自分を見つける

西岡 勇樹
京セラ株式会社 海外営業部
(2019年卒業)

この度ご縁がありまして拙筆ながら ESCADA に寄稿させていただきます 2019 年卒業の西岡勇樹と申します。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。在学生の皆さん、大学生活を楽しんでいらっしゃいますか？ ポルトガル語学科は、ややもすれば“言語を学ぶ語学学科”となんて思われてしまうかもしれませんが、全くそんなことはなく、ポルトガル語圏の様々な国々の文化・文学・歴史・経済に触れられる学びの尽きない素晴らしい学科だと思います。今でこそ、そのように心の底から感じますが、学生時代を振り返りますと、あまりまじめな学生ではなく、ギリギリの成績で単位を取りテニスサークルや学科の友人と遊び耽っていたことを思い出します。

そんな私にも学生生活の中で最も主体的に取り組んで、頑張っってやり遂げたと言えることが一つあります。それは、ブラジルにある UNICAMP という大学への留学です。ポルトガル語に入ったからには何か自分もスキルや語学を獲得したいと思い留学を決意したのですが、行くまでも行ってからも大変な思いを沢山した留学になりました。海外旅行とは違って 1 年近く滞在するわけですから、渡航の手続きや受け入れ大学との連絡、教授への推薦状の依頼などなどやるべきことがたくさんあります。(推薦状を快く受けてくださった T 先生、ありがとうございました！) 沢山の人の助けを借りてなんとか留学にこぎつけたのですが、初めの数か月間はとても辛い生活でした。3 年間みっちり学んだはずのポルトガル語は通じず、ルームメイトは夜中までギターを弾いてテレビを見て騒いでいる…。とんでもない所に来てしまったと思いました。転機が訪れたのは半年たったある日、サンパウロ市にカーニバルを見に向かったバスの車中でした。意中のブラジル人女性と二人で、1 時間ほど隣で話をしながら座ります。「なんとかして会話を続けないと」と今まで学んだことを頭の中で総動員して必死になって会話をしました。その場は大変盛り上がり、「本気で頑張ればいつも以上の力が出せる！」と自分に自信がついた瞬間でした。“ポルトガル語が話せる”と思えたことで、ルームメイトと雑談したり喧嘩したり、旅行したり恋愛したり、生活が豊かになっていく実感がありました。はじめは行くこと自体やポルトガル語を話せるようになることが目的になっていましたが、1 年の生活を通して全く違う価値観を持った人々と生活したり、ブラジル独立から約 200 年の間で醸成された文化を体感したり、素晴らしい留学にできたと自負しています。この寄稿文を読んだ方が少しでも留学っておもしろそうだなと思っていたら幸いです。

皆さんは受験勉強という大きな関門を乗り越え、今、自分の目標への ESCADA (階段)

のどのあたりにいるのでしょうか？ 自分にとっての階段を登る一步はブラジル留学だと振り返りますが、皆さん一人一人が高い目標を掲げ、一步ずつ成長する中で“全身全霊頑張った”という経験に出会えたらとてもうれしいです。躓いた時、共に励ましあう学友も上智大学できっと出会えることでしょう。

さて、現在私は京セラ株式会社というメーカーで海外営業をしております。アメリカ・ブラジルの現地法人とのやり取りや年に数回の海外出張を通じて売り上げ拡大を目指しています。朝8時前から夜5時過ぎまで毎日仕事をするということは大変ですが、慣れとは恐ろしいもので4年が過ぎました。やりたかった事、正確にはやってみたら案外楽しかった事が出来ているのでなんとか続けられていると思います。こんな（GPA1.0 台で何とか卒業した）私でも続いているので皆さんはきっと大丈夫です。企業に入って仕事をする事が正解ではないですが、大学生活という人生のモラトリアムを全力で楽しんでいただきたいと思います。

最後に、私自身の経験から、留学に行きたいというポル語生をサポートしたいという思いがあります。繰り返しになりますが、どこかの国へ留学してみたいと迷っている人がいれば、是非に、チャレンジして欲しい。きっと **Fado** (運命) を変える素晴らしい経験ができるはずです。応援しています。